辰巳会会員便り

井上　函二

新緑の候、皆様には益々ご健勝のこと、存じ上げます。

さて承りますれば、去る四月十四日、辰巳会全国大会を神戸市灘区祥竜寺で催され、鈴木よね様の五十回忌の御法要を、盛大に営まれました由、大慶に存じ上げます。

式後、境内に立つ、お家様の碑の像前で、園遊会をお開きなされましたとの事ですが、さぞかし、お家様の御遺徳のお話しで、見事な、お花を咲かされました事と存じます。

私は、今回頂きました、お手紙で、お家様は一世を風靡された珍らしい女大夫で、実業家としての半面、他人に御親切で優しい面を、お持ちなされた事を承知致しました。

今尚、皆様からお家様として親しまれますことは、その人柄によるものでないかとも思われ本当に喜ばしい事と存じます。

今回は、お手紙により大会の御様子や、お家様のご遺徳を、精しく御通知下され本当に有難うございました。茲に厚く御礼を申し上げますと共に、この上共辰巳会の御発展をお祈り申し上げます。先ずは右御礼まで。

（井上殿は長寿番付西横綱96才　編）

大柳　つる

春立つと申乍ら未だ雪も散る、昨日今日でございます。皆々様健勝に渉らせられお慶び申し上げます。

先日は「たつみ」46号を御郵送いたゞきまして厚く御礼申し上げます。

主人存命中、御誌をいたゞきますと時間をかけて楽しんで拝見させていたゞいて居りました。今その事を胸に浮べまして長寿番付から拝見させていたゞいて居ります。

御一人御一人のお言葉も尊く存ぜられ、会員皆様の御健かを只々御祈りさせていたゞきます。又、鳥羽縁の御方々の御名も一入におなつかしく、今更に遠い路を来た感じでございます。

尚御会の事、まづお世話いたゞいて居ります柳田様には何卒この上共御健康にご留意、お恙なくあらせられます様、只管御祈り申し上げます。存じ乍ら御挨拶申し上げる事もなく、打過ぎて御無礼を重ねて居ります。

大柳逝きまして五年、つゞきまして「たつみ」お送りいたゞいて居りまして、心温る思いをさせていたゞいて居ります。

お目もじの機も得られぬ事、一筆拙なさを省みず御礼を申し上げます。

皆様に御厚情を深く御礼申し上げます。（二月十一日）

小川多喜子

昨日、封書を賜わりまして何事かと拝見致しましたところ、私の写真が出て参りまして吃驚致しました。

あの日は、本当に思いがけぬ楽しい日でございました。あの様に御立派な御法要、又そのあとの園遊会のよいお料理、美しい方々にかこまれ楽しい一日でございました。

扨、私事五月の六日より六日間、札幌に行って居りました。（一人にて立ち一人にて帰りました）それは謙二郎こと病気にて手術致しましたので、見舞かたがた庭の草抜きに参りました。

お蔭様にて明るく過して居りますので安心致しました。

真に楽しく草抜き致し、大きなゴミ袋に四ケ抜き、未だ一袋分残って居ります。私の弟と長男が又改めて何と、鈴木と言うところはと感心致して居りました。一言御礼申し上げます。

唐戸　登美

新緑すがすがしいよい季節となってまいりました。いつも勝手しておりますが皆々様にはお変り御座居ませんか。過日はお家様の五十回忌の御催しをなされまして、御案内頂き乍ら欠席いたしましたところ、当日の新聞の切りぬきを送り下され拝見させて頂きました。真になつかしく以前にお参りさせて頂きました折のことなど、思い出され、しばし昔の思い出にひたりました。ありがとうございました。

御盛会誠にお目出とうございました。御一同様のこの上の御健康お祈り申し上げます。

北尾　素子

入梅も間近にむし暑い日が続いております。辰巳会皆々様には益々お健やかにお過しの事とおよろこび申し上げます。私もお蔭様で元気に日々を何かと忙しく暮しております。

この度は四月十四日全国大会に出席させていたゞき、祥竜寺にて鈴木よね刀自の五十回忌御法要に参列させていたゞきました事、只々有難くてうれしく感謝の気持、一杯でございました。有難うございました。

又々、先日は園遊会のひとゝきの写真、お送り下さいまして有難う御座居ました。早速御礼申し上げねばなりませんのに、毎日ながめながめしてこんなにおそくなり申訳ございません。山本富美子様へ明日にもお届けいたします。御愛憐心よりお礼申し上げます。

向暑の砌、くれぐれも御体御大切に御健康を御祈り申し上げます。

木戸口　孝

鶴首の『たつみ第46号』有難く頂戴いたしました。まっ先に『九十才以上長寿アンケート』を拝読いたしました。皆さんお元気で、老後を楽しく送っておられご同慶に存じます。

人間はどれほど気丈で、生きぬいてきた者でも、年をとれば理性の力は弱くなり、判断力も鈍り感情に走り勝ちになるこれは人間の宿命のようなものと思います。

気がきいているが、マの抜けたところがあり、我乍らボケたのかなあと思うことがあります。

人生八十年時代と言いますが、そうかもわかりません。私の交友中、80才以上の方が、10余名居られますが皆さんお元気のようです。昨今、新人類時代でもあり残念乍らついて行けないように思えるのです。尚坂本寿さんの『わが人生＝尊敬する人と恩人』その他ゆっくり拝読させていたゞきます。

先ずは、ご厚礼申し上げ度如斯でございます。

不尽

嶋内　桃枝

今日は節分、明日は立春ですが、まだまだお寒うございます。幹事の皆様お健やかでございますかお見舞申し上げます。

此度は、『たつみ』46号有難く御礼申し上げます。故主人が『たつみ』に記事を書くのがたのしみで『東都古刹めぐり』をたつみ17号～24号まで、8号分記上させて頂きました。

昭和50年の10月初めよりたつみの原稿を早く書かねば――、忙しい忙しいと言っていた姿や、声がまだはっきり頭に残っていますのに、その年の10月26日夕方、あっと言う間に帰らぬ世界に旅立って行きました。あれから13年たつみを見る度、新たな寂しさ、なつかしさを感じます。皆様の御健祥をお祈りします。

高木　きぬ

たつみ46号をお送り頂きまして誠に有難うございました。いつもお世話になりまして厚く御礼申し上げます。亡き主人（虎之助）の写真の前で拝見して居ります。

岡本様の『苦しき思い出、淡路行』で、ふと主人が話してくれました『行こう会』のことを思い出しました。六甲山へ登ったり、又ある時は、帰りの乗物もなく、明日の出勤時間におくれては大変と歩き通して、ようやく寮に辿り着いた等々――、大正時代、青春真最中、の古いアルバムを取り出して見て居ります。

皆様のご健康を心からお祈り申し上げます。

松村　勲

時下薫風の好季となりました。皆様益々御健勝の段お慶び申し上げます。

扨て、去四月十四日の鈴木よね刀自の五十回忌法要の時は大変お世話になり厚く御礼申し上げます。

あの時、吾々桜友会の一同は、前日京都の御所や大仙院等寺院を見て回りました。未だ桜は相当残っており、久しぶりに京都の春を楽しむことが出来ました。

当日は京都から三宮経由、祥竜寺に参りました。集合時刻前に着いて安心しました。

法要は厳粛そのもの、刀自のありし日の事など、きいて感銘を受けました。あとの寺苑でのパーティも好天に恵れ、早春の陽ざしの下、和気あいあい、刀自の像も喜んで見ておられたことでしょう。

その時の写真、この度、御送り頂きありがとう御座居ました。厚く御礼申し上げます。

松井タケヨ

二月二日午後嬉しくたつみ誌46号有難く拝受致しました。今朝大雪(三日)早朝の暖い室で御誌をよく拝読致し、又今年も九十才以上のアンケートの井上函二様の御文を幾度も拝読、有難う存じました。

亡松井元はM26年5月生が、昭和41年12月足弱のため、運動少なく、何の苦しみもなく静かに天国へ、私も医者の用ない身ながら、足弱く、家では全部自分の事は致していますが、昨年から外出はおそろしくて致しませず、一昨年の秋からの東京でのたつみ会は欠席、一人歩きは致しません。外での事は何事も嫁の秀子に甘えていて致しませんが、声と耳は若人とおなじ故、留守番は致しています。

電話のそばには警察と近所の電話番号をおき、夜は長男、哲(サトシ)が帰宅致しますので用済みです。

秀子は娘時代の学友と外国へ参りますと、おみやげに必ず、洋酒を持帰って呉れます。私は、毎昼、夕食に一合弱の日本酒か洋酒をお薬りがわりにのみお医者さんにほめられております。

東京のたつみ会に出ると、主人の知人、昔よく宅へいらしゃった方にお目にかゝるのがうれしかったのですが、なつかしくこの度も、九十才以上の皆様の御文面、これからも一番私のためになりますから御知らせ下さい。

私は心配事なしで、生子三人、孫四人、曾孫七人で、87才になりました。

吉富志那子

新聞各紙に載せられました、御法要の御様子を拝読させていただきまして、感一入でございました。御出席御芳名に柳田義一様をお見うけ出来ませんでしたが、御案じ申し上げております。

神戸に参ります機会がございましたら、祥竜寺をお訪ねさせていたゞきたく存じて居ります。右御礼まで申し上げます。

物故者名簿

62.7.10迄

御芳名		死亡年月日	享年	最終勤務先
安東重雄		57年11月27日	85才	
高木徳次		57年12月9日	78才	桜麦酒
川越孝教		59年11月26日	80才	大阪支店
小沢経道		61年4月8日	83才	
西山徳次		61年9月16日	89才	日本油脂
岡本平吉		61年10月6日	87才	日本樟脳
煙石隼人		62年1月5日	80才	帝人
山地保		62年2月27日	89才	本店貨物課
杉山茂		62年3月19日	89才	桜麦酒
内藤孝次		62年3月28日	84才	浪華倉庫
石田俊一		62年3月30日	89才	外国電信部
斎藤甫吉		62年6月10日	88才	日本商業

南多魯男君を偲んで

山本濱一

昨年の暮も近い、丁度門脇の白いさざんかが咲きこぼれる朝でした。南多魯男君十二月二日急逝の旨添え書きのある奥さんからの喪中はがきを受けとりました。私は一瞬立ちすくむ思いでした。

かつて、七つの海をヨネマークの船で埋めたいといわれた鈴木船舶部の残り少ない生存者が、また一人減った悲しみは申すまでもありませんが、その上南君とは忘れ得ぬ思い出があったのです。

昭和二年、船舶部が帝国汽船として独立した後、二人は経理部で机をならべていただけでなく、新家庭も隣り同志だったのです。久琢磨さんのお世話で、灘の山麓五毛の畑の中の新築小住宅十戸の南向き、二戸に並んで入居しました。

東約百米に大石川が流れ、その東の篠原一帯は、当時まだ民家のない美しい田園で、山裾に点在する農家の間に、祥龍寺が厳然として見えていました。家のすぐ上は摩耶山と六甲山を分つ杣谷で人影も稀な天然の山道で、谷川がほとばしり、四季折々の山草が豊富に咲いていました。春から夏は鶯が、秋は蜩(ひぐらし)がせせらぎに和して、それこそ岩にしみいるような閑かな渓谷でした。休みの日など二軒そろって、弁当持って、こゝから登山したこともありました。

しかし、これは永くはつゞきませんでした。帝国汽船が、二年足らずで解散したからです。南君夫婦も急きょ、この家を引き払って新任地東京へたって行かれました。

それから二年後の昭和六年には、満州事変が勃発して永い戦時下に入り、その結果は空爆、焦土、終戦、戦後と苦難の歳月が、あわたゞしく流れ去り、その後、遂に顔を合す機会もなく、ただ僅かに年賀状で安否を確かめ合っているうちに、いつの間にか八十三と四(私)になっていたのでした。そこへ突然の訃報、何とかして元気なうちに合っておくべきであったと、今更ながら悔まれてなりません。

すぐ東京へ電話し、最近の模様をお尋ねしました。そして昔会社で「あみだくじ」をして金つばや瓦煎餅などを買ったことを思い出し、お供えに瓦煎餅を送りました。

数日後、奥さんから丁寧な詳し

62.4.14 全国大会. 於 祥竜寺
鍵田氏　山本氏